

教育力を高めるための学校・家庭・地域の連携

－保護者・地域の思いや願いを生かした教育の推進－

I はじめに

急激な社会の変化，とりわけ核家族化や生活スタイルの多様化，希薄な人間関係が増加している社会状況等に伴って，家庭や地域社会の教育力が弱まり，学校教育への比重が高まりつつある。このような状況の中，校長は，家庭や地域の特性やそれぞれが有している教育力を知り，それぞれの思いや願いなどを真摯に受け止め，適切に学校経営に生かしていくことが重要である。

本研究部会では，学校・家庭・地域，三者の相互連携を図りながら，「保護者・地域住民の思いや願いを生かした教育」を推進するための方策等について，事例を通して研究を進めてきた。

II 研究の概要

1 保護者・地域の思いや願いを生かした教育

子どもたちの健全な育成を願うのは社会全体の願いである。特に学校が主体となって，家庭や地域の連携・協力を求め，子どもたちに「生きる力」を身に付けさせたいと考えている。つまり，しっかりとした目標と信念を持ち，多様な人間関係の中で自分の可能性に向かって努力し，自己実現を図ることができる子どもを育てることである。甲州市では，このような考えのもと，平成23年9月に「確かな学力育成プロジェクト」を立ち上げた。地域・家庭・学級から出された課題をもとに，①授業づくり・授業改善，②学級づくり・集団づくり，③保護者・地域住民との連携，の3つに視点をあて具体的な取組を進めている。本研究においても，このプロジェクト設立の経緯や目的から「保護者・地域住民の思いや願い」をくみ取り，それを生かす教育活動，すなわちプロジェクトの具体的な取組と結びつけて実践的な研究を進めることとした。

2 研究の焦点化（研究内容）について

甲州市全体で取組を進めている「あいさつ運動」について，校長は，その取組を学校経営にどのように位置づけ実践を進めたのか，また，保護者や地域住民とどのように連携し実践を広めたのかについて，事例を通して研究協議を深めた。

特に，「あいさつ」を研究の柱にした理由は，①真にあいさつが身につけば，コミュニケーション能力や社会性の伸張につながると考えた。②地域の方々とあいさつができることは，自分がその地域の一員であることを意識するとともに，地域でしっかり活動していく基盤となる。③甲州市全体であいさつ運動に取り組むことや市P連の

活動重点に取り上げられたことから、地域住民や保護者の思いや願いを受け止めそれを生かした教育活動につながると考えたからである。

3 取組実践事例をもとに討議されたこと

- (1) あいさつに対する意識は高まっているが、「形式的な受け止めに終わっている」「自分から進んで」「あいさつの意義がわかっている」「場面に応じて」「地域でも」という点が課題である。
- (2) 地域を巻き込んでの取組が必要→各校の特色ある取組はいいのだが、学校独自の取組だけでは限界もある。市全体で取り組んでいるという意識がまだ低いのではないだろうか。特に大人の意識の高まりを上げたい。
- (3) 地域の人や子どもたちに不用意に声かけができない、という社会的な事情が「あいさつ運動」の広がりを遅らせてはいないか。→地域の大人と子どもたちの日常的なふれあいの機会をつくる必要がある。
- (4) 様々な場面に応じたあいさつの仕方やあいさつの意義を教えること、また、子どもたちが体験を話し合ったり、意見・感想を述べ合ったりする授業をより一層取り入れていく必要がある。

4 あいさつ運動の深まりや持続性、そして地域への広がりを意識した実践例→討議結果をもとに、地域や大人の意識を高めようとする取組を展開した。

- (1) あいさつ運動の広がりをねらい、甲州市の広報「こうしゅう」10月1日号へ特集記事を掲載した取組
- (2) 学区の全戸にPTAが作成した「あいさつ運動」推進のパンフレットを配布した取組
- (3) あいさつ運動の実践テーマを親子で考えたり、横断幕にしたりして、校舎内外に掲示する取組
- (4) 道徳の授業感想をもとに、「学校だより」を使って家庭での意識を高めようとした取組

III まとめと課題

子どもたちを育てるには、保護者や地域の思いをくみ取ることが必要であり、双方向で伝え合うことが連携推進の鍵となる。「日本一あいさつのできる甲州市の子どもたち」を目指しての取組であるが、次の点が課題となった。○「あいさつ運動」を広げたり深めたりする上で、学校と地域が、できることとできないことを明らかにして、それを補い合っていく必要がある。○地域を巻き込んでの取組では、まず保護者に意識を高く持ってもらうことが重要である。○子どもたちが、「あいさつ」について形式的な受け止めに終わらないよう、その意義や意味をしっかりと身に付けられる取組を継続・深化させる必要がある。これらの課題を踏まえ、より有効的な取組を展開し、「あいさつ日本一」を目指していきたい。

(三神 寿男)